

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題

「現代アラブ君主制における正統性原理の変容と再興—イスラーム主義との相克」

2020 年度第 2 回研究会（通算第 3 回目）実施報告

日時 2021 年 1 月 9 日 17:30～19:30（日本時間）

場所 オンライン開催（Zoom）

参加者 4 名（石黒、錦田、白谷、堀抜）

内容 前回研究会での検討内容を踏まえ、各委員が執筆担当予定の内容構想について要約とキーワードを提示したうえで、全体の議論の枠組みと各章で取り上げる内容についての調整を行う。

本研究会は、アラブ君主制 8 カ国（モロッコ、ヨルダン、サウジアラビア、オマーン、UAE、カタール、バーレーン、クウェート）の政治変動に対する耐性に着目し、体制の安定性がどのように維持されてきたのか、そのメカニズムの解明を目的とする。本来であれば、東京（AA 研）と、バイルート（JaCMES）とで交互の開催を予定していたが、新型コロナウイルスの世界的な蔓延を受けて、本年度はオンラインでの研究会の開催となった。

研究会ではまず、前回最後に課題として出されたキーワードと骨子について、参加者が各自順番に発表し、今後予定する各自の研究の目的と内容を示した。堀抜氏は UAE の研究について、近年注目されている「寛容性」のアピールに焦点を当てるとの方向性を示した。白谷氏はモロッコについて、他のモロッコ人研究者との調整を図りながら、国王に対する忠誠を示す儀礼の、実際に行われ方の変化などを明らかにしたいとの案を提示した。錦田氏はヨルダンについて、モロッコとは対照的な基盤の弱さを前提に、国王個人の身体的・精神的な強さを強調する戦略がもつ有効性について論じる方針を示した。石黒氏は、クウェートの 2005～20 年頃の議会の動向に基づき、制憲議会で憲法を定めた国と、上から憲法を授けられた国の違いを論点にまとめる方向性を示した。

これらの報告の後、全体の議論では、各論文に共通の時間軸を設定するか否か、また共有可能な議論の切り口として「新世代の君主たち」という側面を取り上げることができるか、などの意見交換がなされた。本研究会で対象とする君主制国家はいずれも 2000 年前後に世代交代を果たし、比較的若い君主が就任していることが、その背景にある。これら活発な議論を交わした後、今後は今回欠席だった共同研究員とも意見を交換し、より具体的に研究内容を深めて論文執筆を進めていくことが確認された。

（以上）